上　毛　五　偉　人

熊野知事より紹介されました上毛の五偉人に就て、當日贈られた小記述を次に轉載して時局柄、我等日本の偉大なる先人を偲び、歴史的記憶を新にする事も頗る意義ある事と思ひます。(一記者)

1.新田義貞

新田義貞は生粋の上州人である。後三年の役に勇名を轟かせ、古今の名將と謳はれた八幡太郎義家十世の孫に當る。新田氏は義家の第三子義國の長子義重が新田莊を開いて、後子孫繁榮して、上野・越後にわたり大勢力を有するに至つた。代々敬神の念厚く經津主神を祀りたてまつれる貫前神社には、殊に崇敬の至誠を捧げた。義貞が現世の富や權勢や名譽を求めず、大義名分に基いて、後醍醐天皇の御親政を翼賛しまゐらせたことは、豪も怪しむに足らない

されば逆賊北條高時が、天皇の宸襟を惱まし奉れるに當り、義貞は大塔宮護良親王の令旨を奉じて、誓つて高時を滅ぼさうと圖り、元弘三年五月八日新田莊生品明神の祠前において勤皇の義兵を擧げた。(毎年五月八日の例祭には、氏子が武裝して鎌倉に向ひ、矢を放つ行事がある。之を鏑矢祭(かぶらやまつり)といふ。)宗徒の兵百五十騎、勇躍して笠懸野に打つて出て、大中黒の大旗を五月の風に飜した之を聞いて馳せ加はれる一門の勇士は忽ちにして二萬餘騎に上つた。義貞は忠勇義烈なる將士を率ゐて故郷の山河に訣れを告げ、疾風の如く鎌倉に押寄せ、稻村ヶ崎より進入して、一擧にして高時を殪し、百五十年に亘る鎌倉幕府を滅ぼした。兵を擧げてより僅か十五日であつた。建武中興の大業は、こゝにおいて大成するに至つた。天皇は深く義貞の忠誠を嘉したまひ、之を重用せられたが、久しからずして足利尊氏の叛するに及び、義貞は勅命を奉じて轉戰、箱根竹の下の戰、利を失ひて歸京し、その後を追うて西上せる尊氏の軍を邀へて、楠木正成、名和長年、北畠顯家等の諸將と共に之を京都に擊ち破り、遠く西海に奔らしめた。尋いて賊將赤松則村を播磨の白旗城に圍み攻めたが、水軍を有せざる爲に捗々しく西下し得ないでゐる中に、尊氏は鎭西の大軍を率ゐ、海陸並び進んで攻め上つて來たので、義貞は退いて兵庫を保ち正成と力を協せて之を防いだ。その時義貞は正成に向ひ、慨然として「賊勢が盛んであるから、敗卒を驅つて之に當ることは困難であるが、大命を奉じて下向しながら一城をも拔く能はずして、こゝまで引き揚げたことすら武門の耻である。されば この一戰において潔く討死を遂げて、名を後世に殘さうと思ふ」と言つて、決死の覺悟を表はしたところ、正成は之を憂へ、「御賢慮の程は、十分お察しするけれど、進むべくして進み、退くべくして退くのは名將の道である。世間の者共が何と申しても、御心にかけさせられるな。先年高時を滅ぼし、今年の春尊氏を走らせたのは、固より御稜威の致す所ではあるが、また貴殿の武略に因るものである。貴殿は官軍の總帥であるから、自任自重していたゞきたい」と言つて慰め勵ました。二大忠臣の心中察するだに胸の迫る思ひがする。正成の忠告で戰死を思ひ止つた義貞は賊の大軍を邀へて奮鬪したが、衆寡敵せず萬死に一生を得て京都に歸つたが、正成はこの時、七生報國を誓つて、湊川で戰死を遂げた。それより聖駕は延曆寺に幸せられ、回天の謀をめぐらされたけれど、官軍の勢益々非にして天皇は一旦京都に還幸あらせられ、義貞は命によつて皇太子恒良親王及び尊良親王を奉じて越前に下ることゝなつた。そのとき日吉神社に「願くは征旅萬里の末迄も、擁護の御眸を廻されて、再び大軍を起し、朝敵を亡す力を加へ給へ。我縱令不幸にして存命の中に此望を達せずといふ共、祈念冥慮に違はずば子孫の中に必ず大軍を起す者有て、父祖の屍を雪めんことを」といふ願文を奉つた。實に正成の七生報國の言と相並ぶべき赤誠の現れである。越前下向の後も戰頻に利を失ひ、金ヶ崎城は陷り、皇太子は捕へられ給ひ尊良親王は自刄せられ、嫡男義顯は親王に殉ずるに至つた。しかしながら義貞は非運に屈することなく、奮然として越前を經略し、官軍の勢を振ひ興さうと努めたが、その甲斐なく、延元三年閏七月二日、藤島燈明寺畷の一戰に不慮の戰死を遂げた。時に年三十八。朝敵征伐を命ぜられたる宸筆の綸旨を金襴の袋に納め、肌に着けて斃れた純忠至誠は、長く後人をして感奮興起せしめる。